障害者のニード分析——(1)

上田市の実態調査から

橋本厚生

はじめに

社会福祉サービスを考える際に最も重要な，そして先決問題はサービスを受ける者がどのようなニードを有しているかである。本論文では，このニードを扱うが，一口にニードといっても非常に幅広く，複雑である。とりあえず試行錯誤で，数回に分けて報告する。今回は特に上田市という特殊地域に限定する。従って，上田市のもつ特殊な性格が一貫して結果に現われる。また，一般理論の構築を目ざすものではなく，この地域での特殊実態を知ることに焦点を当てている。ニードの一部分として今回取り上げるものは，11項目の一般的なニードに対する障害者の反応及びそれを実現させる一般的なものとしての施設に対する反応である。

I．目　　的

以下のものに限定する。

1．11項目のニードに対する希望の頻度分布を見ること。
2．1の分布を，障害者の「年齢」，「等級」，「生活水準」と合せて考察すること。
3．4種類の施設に対する希望の頻度分布を見ること。
4．3の分布を，障害者の「年齢」，「介護者」，「病名」と合せて考察すること。

II．方　　法

上田市社会福祉協議会及び上田市社会福祉事務所が行った（1978年）実態調査に筆者の研究を便乗させてもらった。設問や目的を充分に説明した後に，143名の民生委員が各担当地域の該当障害者の自宅に赴き，調査内容を説明し，対象者もしくはその家族の者が回答した。民生委員が対象者に聞きながら記入したケースもかなり多い。回答した者は約2300名であった。今回は1064名を分析対象とした。

対象者のプロフィールは表1の通りである。

表1　対象者のプロフィール

表1-1　年齢分布

年齢	人数	%
0～6歳	6	0.6
7～12	20	1.9
13～15	6	0.6
16～18	14	1.3
19～29	32	3.0
30～39	77	7.2
40～49	120	11.3
50～59	181	17.0
60～69	251	23.6
70～	329	30.9
不明	28	2.6

表1-2　性別

性別	人数	%
男性	586	55.1
女性	420	39.5
不明	58	5.5

表1-3　障害部位分布

（複数回答）

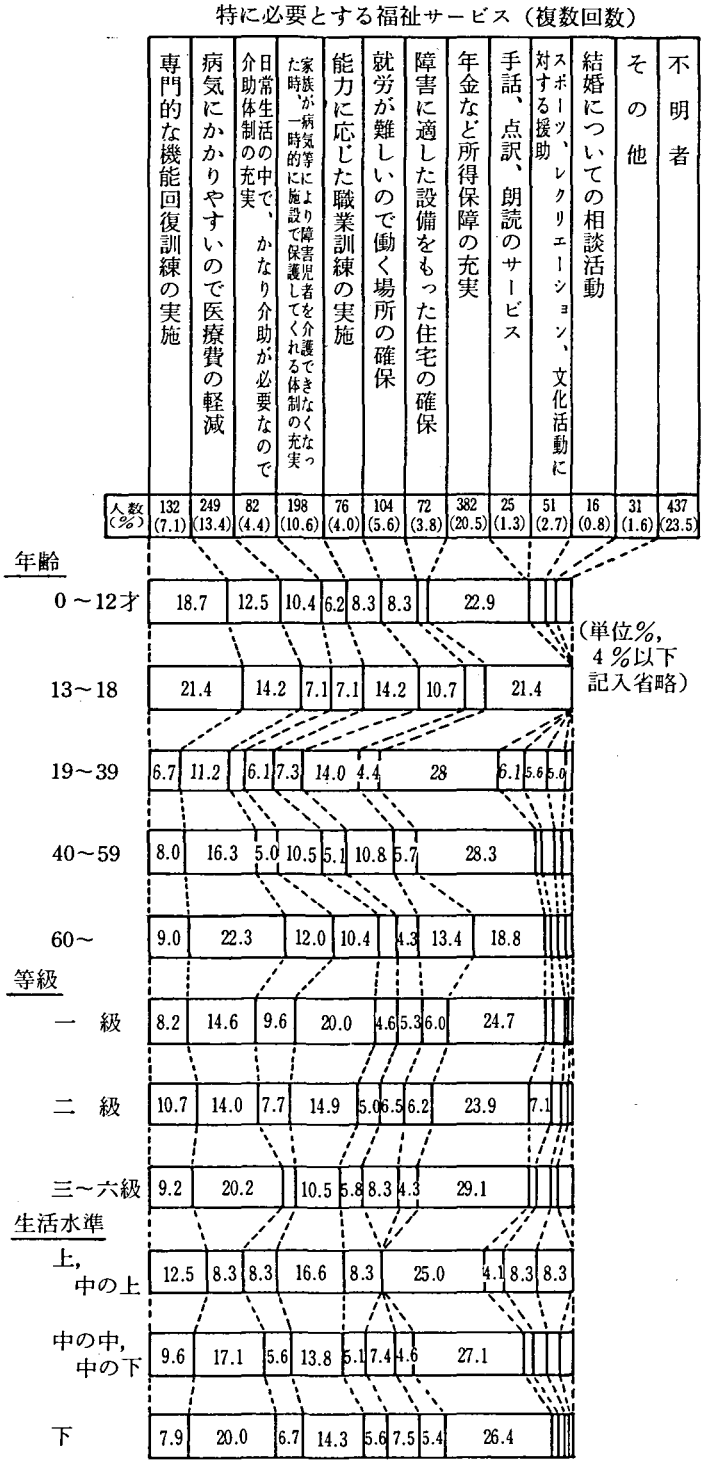
障害部位	人数	%
視覚	158	11.1
聴覚	188	13.2
平衡感覚	37	2.6
音声言語	69	4.8
上肢	266	18.8
下肢	397	28.8
体幹	148	10.4
心臓	35	2.4
じん臓	27	1.9
呼吸器	24	1.6
不明	65	4.5

表1-4　病名分布

（複数回答）

病名	人数	%	病名	人数	%
脳性マヒ	214	10.5	角膜・水晶体疾患	53	2.6
脊椎性小児マヒ	325	15.9	網膜，視神経疾患	32	1.5
脊椎損傷	142	6.9	心臓疾患	14	0.6
脳血管障害	234	11.5	じん臓疾患	25	1.2
骨関節障害	183	9.0	切断	86	4.2
リウマチ性疾患	256	12.5	その他	199	9.7
中，内耳性疾患	167	8.2	不明	102	5.0

図1　必要とする福祉サービスの分布及び年齢，等級，生活水準との関係



III. 分析と結果

1．11項目の一般的なニード

図1は，11項目のニードの希望分布及び年齢，等級，生活水準との関係を示している。これによると，最も多くの者が希望するニードは，「年金など所得保障の充実」(以下所得保障と略す)であり，382人の者がこれを選択し，その比率は20.5%となっている。次いで「病気にかかりやすいので医療費の軽減」（以下医療費の軽減と略す）が249人の13.4%となっている。「家族が病気等により障害児・者を介護できなくなった時，一時的に施設で保護してくれる体制の充実」（以下保護施設と略す）も10.6%でかなり多い。中間の頻度を示すのが，「専門的な機能回復訓練の実施」（以下機能回復訓練と略す），「日常生活の中で，かなり介助が必要なので介助体制の充実」（以下介助体制と略す），「能力に応じた職業訓練の実施」（以下職業訓練と略す）及び「就労が難しいので働く場所の確保」（以下働く場所と略す）である。

さて，年齢別に見ると，「機能回復訓練」は18歳以下の者に多く，19歳以上の者には急激に減少している。逆に，「医療費の軽減」は40歳以上の者に多くなる。「介助体制」は0～12歳の年少の者と60歳以上の者に多い。「施設保護」は年齢の増加にしたがって増加する傾向にある。「職業訓練」は13～18歳代に最も多い。「働く場所」は13歳から59歳の間に多い。「障害に適した設備をもった住宅の確保」（以下住宅と略す）は60歳以上の者に多く，その他の年齢層ではあまり希望がないようである。「所得保障」は最も多くの希望のあったニードであるが，全ての年齢層において多く希望されている。ただ，59歳までの年齢層では全て一番多いニードの対象となっているが，60歳以上では「医療費の軽減」に次いで二番目のニードとなっている。「スポーツ，レクリエーション，文化活動に対する援助」（以下文化活動と略す），「手話，点訳，朗読のサービス」（以下手話と略す）及び「結婚についての相談活動」（以下結婚と略す）の三つのニードは，全年齢層においてあまり希望されていないが，0～12歳と19～39歳の年齢層に比較的多くなっている。

表2　等級とA. D. L能力

等級＼A.D.L	軽　度	中　度	重　度
一級	77 (47)	42(25.6)	44(26.8)
二級	128(61.8)	55(26.6)	24(11.6)
三～六級	555(88.9)	59 (9.5)	9 (1.4)

実数　（　）内%

第3表　生活水準の分布

上・中の上	35人
中の中・中の下	789人
下	153人

等級別では，年齢の場合と相違して，各ニードの分布はあまり変化していない。特に目につくことは，「医療費の軽減」が三～六級の軽度な障害者に多く希望されること，「介助体制」は一級の者に多く希望され，軽度の障害者程希望を示すことが少なくなること及び「施設保護」へのニードは，級が上がるにつれ，つまり軽度になるにつれ減少してくる傾向にある。二級の所で，年齢，等級，生活水準のいづれにもあまり希望が示されていない「手話」が7.1%と最も多く希望されているのが目立つ。

生活水準別では，水準が低くなるにつれ「機能訓練」への希望も減少してくる。逆に，「医療費の軽減」は水準が高くなるにつれ減少してくる。また，生活水準が上・中の上の層で，年齢，等級においてほとんど表明されていない「文化活動」と「結婚」が共に8.3%と増大していることが目立っている。

なお，等級分類についてよく言われることであるが，その正確さを調べる意味で表2を示した。これは，A. D. L.（日常生活動作）の総合評価と等級を比べたものである。A. D. L. は，「入浴」，「トイレ」，「食事」，「服の着脱」及び「移動」について，それぞれ，1．1人でできる。2．一部を介助してもらえればできる。3．全て介助してもらう，の3段階評価から決定している。結果は，級が上がるにつれ軽度が少くなり，級が下がるにつれ重度は少くなり，等級はおよそ信頼できる。さらに，生活水準の各層間にはかなり人数的な相違があり，以後の分析や考察には常に注意すべきものである。表3はこのことを示している。

表4　等級，生活水準，年齢等のクロス集計から見た11項目のニードの分析表（複数回答）

福祉サービス	生水／等級	上・中上	中中・中下	下
機能訓練	1	5 (1)	5.6 (17)	7.5 (3)
	2	—	7.8 (31)	7.9 (4)
	3	5 (1)	8 (26)	7 (5)
	4	5 (1)	8.7 (18)	8.8 (6)
	5	—	7 (13)	7 (1)
	6	—	9.3 (8)	9.3 (3)
医療費軽減	1	—	7.7 (26)	7.5 (7)
	2	7 (1)	8.4 (26)	8.7 (10)
	3	—	8.4 (25)	8.6 (8)
	4	—	8.6 (31)	9.2 (8)
	5	10 (1)	8.6 (24)	7.8 (6)
	6	—	8.6 (21)	9.2 (5)
介助体制	1	—	5.8 (18)	6.4 (7)
	2	10 (1)	7.3 (18)	7 (6)
	3	10 (1)	10 (4)	8 (1)
	4	—	8.6 (6)	8.7 (2)
	5	—	7.2 (4)	—
	6	—	7.5 (2)	10 (2)

福祉サービス	生水／等級	上・中上	中中・中下	下
施設保護	1	—	7.3 (40)	8.8 (6)
	2	8.5 (2)	8.4 (33)	7.9 (10)
	3	—	8.8 (24)	9.1 (6)
	4	9 (1)	9 (10)	8 (5)
	5	—	8.4 (14)	—
	6	7.5 (2)	9.6 (11)	10 (4)
職業訓練	1	5 (1)	8 (4)	7.8 (6)
	2	—	7 (9)	6.7 (4)
	3	—	6.6 (11)	9 (2)
	4	—	7.6 (10)	8 (1)
	5	—	8.1 (6)	6 (2)
	6	—	9.3 (7)	8.6 (3)
働く場所	1	2 (1)	6.5 (10)	7.5 (2)
	2	—	7.9 (16)	6.7 (4)
	3	—	7.1 (12)	8 (1)
	4	—	7.2 (17)	8.3 (5)
	5	—	7.6 (11)	6.7 (4)
	6	—	8.2 (5)	8 (2)

福祉サービス	生水／等級	上・中上	中中・中下	下
障害者用住宅	1	8 (2)	7.9 (10)	8 (2)
	2	—	8.2 (13)	8.4 (7)
	3	—	8.5 (7)	9.3 (3)
	4	—	8.1 (7)	8 (1)
	5	—	8.3 (4)	8 (1)
	6	—	7 (3)	10 (1)
所得保障	1	—	6.3 (47)	7.5 (15)
	2	10 (1)	7.9 (57)	7.7 (13)
	3	—	8.1 (50)	8.4 (11)
	4	5 (1)	8.1 (50)	8.3 (11)
	5	4 (2)	8 (41)	7.9 (13)
	6	—	8.8 (23)	9.4 (7)
手話・点訳・朗読	1	—	8.7 (14)	7 (1)
	2	—	6 (13)	8 (1)
	3	—	9 (2)	—
	4	—	—	—
	5	—	—	—
	6	—	10 (1)	9 (1)

福祉サービス	生水／等級	上・中上	中中・中下	下
スポーツ・レク・文化活動援助	1	—	5.4 (1)	6 (1)
	2	—	6.1 (9)	6 (1)
	3	—	7.5 (8)	—
	4	5.5 (2)	7 (5)	—
	5	—	8.7 (10)	—
	6	—	10 (1)	10 (1)
結婚相談	1	—	6 (3)	—
	2	—	6.3 (3)	—
	3	—	6.6 (3)	8 (1)
	4	5.5 (2)	4.5 (2)	—
	5	—	—	—
	6	6	6 (1)	—

(　)内は件数
数値は年齢の平均値

2．等級，生活水準，年齢，ニードのクロス分析

図1の分析では，各特性間の重複からの考察ができない。そこで表4を示す。表4によって，図1の結果を確め，さらにこまかく見ていく。表中の数字は年齢の平均値を示している。年齢は表1－1に示してある10個の分類に従い10段階で示してある。等級はここでは6段階に分けてあるが特に意図はない。小さく分類したため人数が少なくなってしまったので，あまりこまかな結果の解釈はさける。分析の前に頭に入れるべきことは，表3に示してあるように生活水準の上・中の上に35人しか入っていないことである。また，表1－1に示してあるように，年齢分布は高年齢層にかたよっていることである。これらは上田市地域の障害者の特色であり，本論文を特殊研究に余儀なくしているところである。

さて，「機能訓練」については，図1では年少グループに多く，上・中の上の生活水準グループにやや多いということであった。同じニードについ

て表4を見ると，人数が極めて少い上・中の上グループの者が等級1級，3級，4級において平均5歳という数値を3人が示している。一応図1の結果と同じ方向を示している。また，生活水準中の中•中の下においても1級のところで平均5.6歳の者が17名このニードを表明していることがあらたに発見し得る。逆に，高齢を示すところの8.8歳，8.7歳，9.3歳といった平均年齢の者は，他の年齢層の者よりもともと圧倒的に実数が多いにもかかわらずここのニードにおいては少いのである。

「医療費の軽減」については，図1では「機能訓練」とは反対の傾向を示していた。表4を見ると，年齢に関しては，8歳以上の者や9歳以上の者が非常に多いことが分る。この点は図1と同じ結果である。また，上・中の上のグループの者が等級5のところで1名見られるが，この年齢も10で最高年齢層となっている。しかし，等級については，等級の低い高齢者が多いにもかかわらず等級の高い高齢者もかなりいることが分る。生活水準では，図1の通りに下の水準の者が他のニードにくらべ多いほうである。

「介助体制」については，図1では，年少者で，級の高い，生活水準の高い者が多く表明していたが，表4ではおよそ同じ傾向を示しているものの，違った面も示している。つまり，年少の者が1級，2級のところで，そして中の中・中の下のところで集中しているということである。また，図1で少いとされた下の生活水準に，高齢者が2名見られることである。また，等級の高い所に年少の下の生活水準グループの者が集中している。

「施設保護」については，図1では等級が高くなるにつれその希望が多くなっていたが，表1ではその傾向が明白に表われ，中の中・中の下のクラスで1級，2級，3級に圧倒的に集中し，実に73名にも達している。年齢についても図1の結果をより明白にし，年少と中年のグループが非常に多い。また，他のニードに比べ，上・中の上のグループが最も多くこのニードを表明している。

「職業訓練」については，図1では年少のグループに多く，上・中の上に比較的多いニードが見られた。表4では，中の中・中の下及び下のグループで年少の者が多く見られ図1の通りである。しかし生活水準の上・中の上には，図1の印象とは違って，1名の者しかこのニードは示していない。

「働く場所」については，図1では，19歳から59歳の間に多くの希望があり，生活水準の上・中の上に比較的多く，等級別には大きな相違は見られなかった。表4では，生活水準上・中の上には1名しか入っていない。しかし，年齢については同じ傾向を示し，7.2歳，7.9歳，7.1歳，7.6歳の者が中心になっている。また，等級に関しては，図1の通り相違はほとんど示していない。

障害者の「住宅」については，図1では，60歳以上の者に比較的多い希望を示し，等級の高い者が比較的多い希望を示しているが，表4においてもほぼ同じ傾向を示している。8.1歳から8.5歳が多く，9.3歳が3名，10歳が1名となっている。また，等級の1級と2級に多くの人数が見られる。

「所得保障」については，図1の示すように，生活水準，等級のいかんにかかわらず多くの者がそのニードを示していた。表4を見ても多くの人数がまんべんなく分布しているのが見られる。しかし，等級が低い者に比較的多くの希望が見られたが，表4で見ると，5級，6級では少くなっている。年齢については図1と同じく，高齢者は比較的少く，表4では7.9歳から8.1歳に集中している。

「手話」，「文化活動」，「結婚」については，図1では同じ傾向を示し，19歳～39歳に多く，生活水準上・中の上に多く見られた。表4で見ると，年齢では，6歳頃から8.7歳頃の間の者が中心を占めている。特に「結婚」では4.5歳から36.6歳の者が中心である。ただし，等級について，図1の手話の二級の7.1%が目立っていたが，表4では，やはり二級の生活水準中の中・中の下のところに13名が集中している。しかし，この手話を希望するものは，図1の生活水準の分類では明確にでていない。

3．施設の利用に対するニード

図2及び表5と表6は施設に対する希望を示している。現在のところ多くの社会福祉的ニードは何らかの施設や機関を通して満されている。一般的なニードをより現実の具体的なニードとして調べるには，それを満す施設なり機関に対する希望

図2　施設の利用について

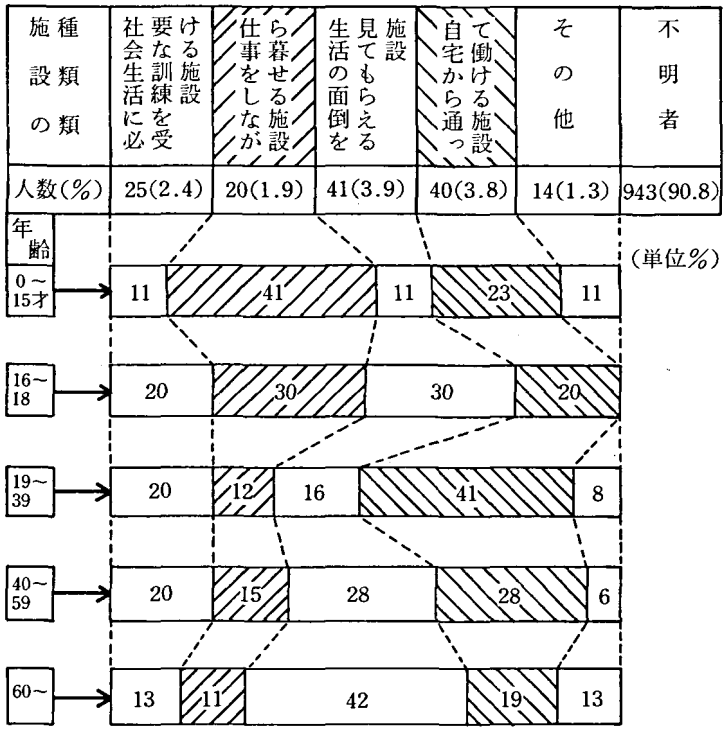


表5　介助者と施設希望の関係

介助者	人数(%)	施設利用希望 人数(%)	施設の種類 社会生活に必要な訓練をする施設	仕事をしながら暮せる施設	生活の面倒をみる施設	通って働ける施設	その他	
配偶者	144 (13.5)	24 (42.8)	7 (28)	3 (12)	8 (32)	3 (12)	4 (16)	(100)
父母	44 (4.1)	17 (30.3)	4 (19)	1 (4.7)	10 (47.6)	4 (19)	2 (9.5)	(100)
子供	44 (4.1)	4 (7.1)	1 (14.2)	—	2 (28.4)	2 (28.4)	2 (28.4)	(100)
祖父母	5 (0.5)	1 (1.7)	—	—	1 (100)	—	—	(100)
兄弟	12 (1.1)	2 (3.5)	1 (25)	1 (25)	—	2 (50)	—	(100)
親戚	2 (0.2)	—	—	—	—	—	—	
隣人・知人	1 (0.1)	—	—	—	—	—	—	
その他	33 (3.1)	8 (14.2)	—	—	—	—	—	
不明	779 (73.2)	—	1 (20)	—	4 (80)	—	—	(100)
	(100)	(100)						

表6　病名と施設希望の関係

病名	施設利用希望 人数 (%)	施設の種類 社会生活に必要な訓練をする施設	仕事をしながら暮せる施設	生活の面倒を見る施設	通って働ける施設	その他	
脳性マヒ リウマチ	39 (32)	7 (17.9)	3 (7.6)	14 (35.8)	11 (28.2)	4 (10.2)	(100)
脊椎性小児マヒ, 脊損, 骨関節, 切断	28 (23.5)	6 (18.1)	6 (18.1)	8 (24.2)	10 (30.3)	3 (9)	(100)
中，内耳	5 (4.2)	—	1 (14.2)	3 (28.4)	3 (28.4)	—	(100)
角膜・水晶体, 網膜 視神経	10 (8.4)	1 (16.6)	—	2 (33.2)	3 (33.2)	—	(100)
心臓，じん臓	5 (4.2)	—	—	2 (28.4)	2 (28.4)	3 (42.6)	(100)
その他	18 (15.1)	5 (21.7)	5 (21.7)	6 (26)	5 (21.7)	2 (8.6)	(100)
脳血管障害	14 (11.7)	3 (21.4)	3 (21.4)	4 (28.5)	2 (14.2)	2 (14.2)	(100)
	(100)						

を見るのが良い。

一般的ニードの場合80%近くの者が回答しているのに対して，図2によると，ここでは10%ぐらいの者しか回答していない。そこで，施設に対する希望については，年齢，介護者，病名それぞれ別個に分類して見るにとどまる。三つの特性を同時に比較すると，人数が非常に少くなり，解釈に無理が生ずる。

年齢別では最も多くの者が希望する施設の種類は「仕事をしながら暮せる施設」,「生活の面倒を見てもらえる施設」,「自宅から通って働ける施設」である。しかし，これらは年齢によってかなり相違してくる。「社会生活に必要な訓練を受ける施設」(以下社会生活と略す)は，0～15歳及び60歳以降において少く，16歳から59歳までが比較的多く希望している。「仕事をしながら暮せる施設」(以下仕事と略す）は年齢が高くなるにつれ，その希望は減少する。逆に「生活の面倒を見てもらえる施設」(以下生活面倒と略す)は，年齢が高くなるにつれその希望は多くなる。但し，16～18歳のところでは比率が高くなっている。「自宅から通って働ける施設」(以下通所労働と略す)では，19歳～39歳にそのピークがある。

表5は，対象者を日常介護している者の違いと施設との関係を示している。介護者となっているのは，配偶者が13.5%で最も多く，次いで父母の4.1%，子供の4.1%となっていて，他はわずかである。介護者が配偶者となっているグループは，「生活面倒」と「社会生活」を目標にした施設を希望している者が多い。父母が介護者の場合，「生活面倒」が多く，次いで「社会生活」と「通所労働」である。子供の場合は，「生活面倒」と「通所労働」である。施設を利用する希望のある者は，全体から見ると，配偶者，父母，子供の順になっている。しかし，人数の少い祖父母と兄弟にその希望が表われていることは注目すべきである。

表6は，対象者の病名との関係を示している。全体的には，脳性マヒ，リウマチ，脊椎の疾患，切断といった運動上の障害者が多く，次いで，やはり運動障害をかなりもっている脳血管障害者が多い。脳性マヒ，リウマチでは，「生活面倒」と「通所労働」に多く集中している。脊椎の疾患，切断も同様な傾向を見せている。同様に，中・内耳と眼の疾患及び心臓，じん臓など内部疾患も「生活面倒」と「通所労働」を選ぶ者が多い。しかし，脳血管障害では，「通所労働」の代りに，「社会生

活」と「仕事」を選ぶ者が比較的多くなっている。

IV. 考察と結論

1．11項目の一般的ニードについて

ここで一貫して特徴的にとらえ得ることは，年齢の相違である。これは，さらに本調査の対象者に高齢者が多いということからも影響されている。「機能訓練」の結果は，年少のグループにこの希望が多かったが，等級の一級には，5.6歳の者が17名おり，この数字をそのまま高齢者のそれと比較するとあまり特徴的とならなくなる。しかし，高齢者の数が圧倒的に多いことを考えると，この「機能訓練」へのニードは，少年グループの障害の重い者により集中的に表明されていることが推測され得る。障害のハンディをできるだけ克服し，一般社会へ適応しようとする若い人やその家族の意欲がよくうかがえる。また，軽度の者より重度の者にとってやはり機能訓練の必要性は高いであろう。「医療費の軽減」については，一般的な考え方で納得がいく。つまり，医療にかかる者は一般に老人が多いということ及び経済的に余裕のない者にとっては医療費の軽減は強く望まれるであろう。また，等級の高い者は，種々の病気になりやすく医療にかかわることも多いのである。「介助体制」の結果，つまり年少の者で，比較的重度の者がこのニードを表明していることはうなづける。親にとって日常の介護はかなり負担であるし，また家庭で介助してくれる者がいると助かるという声はよく聞かれることである。しかし，このニードになぜ高齢者が強く表明していないのか分からない。「施設保護」では，特に障害者のもつ障害からくるニードがはっきり現われ，等級が高くなるにつれ多い希望を表明している。従って，ここでは家族の経済状態はあまり関係なく，上・中の上のグループに多いことが理解できる。ここでは「介助体制」よりももっとはっきりと障害者，特に重い障害者の介助の負担を施設へ「入所」して肩代りしてもらう希望が強く出ている。「職業訓練」では，さすがに高齢の者は出現せず，これから社会に出ようとする年少グループに多く希望されている。おそらく18歳頃の者に希望されていると思われる。「働く場所」については，最も働き盛りの中間の年齢に多いことが分る。「住宅」では，当然重度の者が多い。この住宅は障害に合せて作られる住宅だからである。しかし，高齢者に希望が特に多い理由は分らない。「所得保障」については，特性に関係なく多くの者が一様にニードを表明している。これは，おそらく，「所得保障」という言葉が幅広く，一般的な常識を表わしているからだと推測する。例えば，「福祉の向上」とか「障害者への理解」といった項目をもしたずねれば，同じような結果が得られたであろう。しかし，「所得保障」が直接対象者の手にとどく金銭に関するということを考えても，この結果はうなづけよう。「文化活動」と「結婚」は，常識的に理解し得る。つまり，年少グループ，特に学齢期にある者や青年に多いことは理解し得る。「手話」についての結果，すなわち二級の者で生活水準の中の中・中の下に多いのは，単に，聴覚障害者の比較的若い人々が，この種の特性に多いからにすぎない。

2．施設利用について

施設利用の全体的な結果は，大きく二つに分けられ，ひとつは，施設に入所して生活の丸ごとそこで過したいと希望する者と，部分的に施設で暮す，もしくは，就労や労働の場として特に施設を選ぶ者である。一般に，前者には，重度で高齢の者が多く，後者には年少から中間の年齢の者で比較的中位の障害ハンディを存する者が多い。本調査の結果，つまり「社会生活」に対する希望が多かったのは対象者に高齢者が多かった理由による。しかし，高齢者はどちらかと言えば「生活面倒」の方を選び，老人ホームのことを念頭に置いたようである。従って，「仕事」を目標としている施設への希望は高齢者には少い。しかし，「生活面倒」に16歳～18歳の者がやや多くなっているのは，特に重度の年少グループの者が集中していると思われる。「通所労働」では，働き盛りの者や青年が多いのは当然であるが，また，すでに家族を有している者もいるので入所する施設は希望しないはずである。「介護者」の分類では，当初の予想通りにはならず，全く逆の結果もしくは解釈しようのない結果がでてしまった。つまり「介護者」が子供の場合，施設入所が多いこと，そして父母，配偶者には比較的少いと予想していた。しかし，こ

れらのグループを人数的にそろえてより詳しく調べると，違った結果が生じるかもしれない。なお，人数の少い「祖父母」と「兄弟」に，少しではあるが施設利用の希望があることは，筆者の予想をいく分でも証明しているようである。つまり，かなりの負担となっているか，当人が非常に居づらく思っているはずである。全体的に運動面にハンディを有する者に施設利用が多い理由は，ひとつに重度者が多いことでありもうひとつには介助が大変だからである。脳血管障害者はやや違った結果を示し，仕事も入所を選び，通所を選んでいない。このタイプの障害にはもちろん年少グループや中間の年齢層の者は少い。従って生活丸ごとまかせる場所を希望している。しかしまたこのタイプの障害は，中枢神経に障害を持つため，多くの併発する障害を持ち，かなり重症であるので，施設に入り込むことを希望している者が多い。